「至誠小」条例廃止求め提出

直接請求の請求書 住民有志、署名活動へ

倉吉市の成徳、灘手小を統合して来年4月に「至誠小」を開校する学校設置条例を巡り、同市の住民有志が同条例廃止を求め、地方自治法に基づく直接請求を行うための請求代表者証明書交付申請書を市に提出したことが26日、分かった。

市から請求代表者証明書が交付された後、住民は署名活動を始める。市有権者の50分の1以上の署名を添えて市に請求すれば、市は同条例を廃止する議案を市議会に提案することになる。

申請書を提出したのは「新校名の再考を求める住民直接請求の会」。同会は「公募応募者341件の内150人が提案した『打吹』は採用されず、ただ1人が提案した『至誠』が採用された。誰もが驚く不自然な選考結果」とし、学校統合準備委の選考過程が「一般常識から離れた内輪のルール」などと主張。同条例を廃止し「広く市民の声を生かす民主的な方法によって校名を決定すること」と求めている。

直接請求に向けた行動について同会共同代表の一人である深田哲士さん(75)は「開校まで猶予はないが、より多く集めたい」と話した。

市が証明書交付を告示した日から1カ月以内で署名収集できる。市によると、9月1日時点の有権者数3万8158人に基づけば、764人の署名が必要。

新校名を巡っては、市教委が名称案を公募し、学校統合準備委が最終的に「打吹(うつぶき)」と「至誠」の2案から「至誠」で集約。これを受けて市側は9月定例議会に新校名を「至誠」とする条例を提案したが選考過程を巡り議会は紛糾。広田一恭市長が議案取り下げを求める異例の事態に発展したが、最終的に同条例は可決成立した。

（本高屋修）

gakugei@nnn.co.jp

私の視点

至誠という言葉に命吹き込む

田中　照節（岩美町大谷、74歳）

倉吉市の小学校の統合による新しい校名が至誠小ということに決まったことに対して、不平不満の声が後を絶たない。そんなに嫌な名であろうか。私など至誠を座右の銘にしている。

出典は『中庸』の「至誠は息むこと無し、息まざればすなわち久し、久しければすなわち徵あり」。至誠の頭上には天、あるいは神という意識がある。神の意思に沿った行動をしようと志し、日々孜々として行動しようとしているが、自我利己心が強いため、なかなか思うようにならない。しかし、少しずつでも続けて小善を累積していくと、10年20年後には徵（好果）が結果として出てくる。

やはり、善悪どちらにしてもエネルギー保存の法則が働くので嘘がない。新約聖書の中でも「神は侮られるような方ではない。人は自分の播いたものを刈ることになる」とパウロが言っている（ガラテア人の手紙、6章）。

私は至誠という言葉が大好きだ。小学生に至誠という意味を理解してもらうことはなかなかむつかしい。しかし、先生方の生きる姿勢によって感化教育することが、一番至誠という言葉に命を吹き込むことになる。

私は祖父という立場で孫に、至誠のかけらでも吹き込んでいきたい。そういう志があると、人生は楽しい。

11月テーマ 学校

皆が納得できる解決策を

牧野　紀史（倉吉市大原、82歳）

少子・高齢化の今日、子どもの数が少なくなり、学校の統廃合は必然とされている。しかし、いろいろな障壁があり、そう簡単に事は進まない。それぞれの地域に特性があるから難しい。さらに、校舎はどこに、新しい校名は…など。

倉吉市では、校名を公募しながら1票の校名が採用された。どんないきさつがあったのか分からないが、住民が納得するはずがない。何とか、皆が納得する解決策を見つけ出してスタートしてほしい。そうすれば、わだかまりは、いずれ時が解決してくれると思う。

というのは、私が学んだ小中高は、いずれも校舎など跡形もなく、校名も新しくなっている。こんな該当者は数多くいるだろう。さみしい気持ちはあるが、学んだ12年間が脳裏にしっかりと焼き付き、決して忘れることなく残されているから、消えた校名にも誇りを持ちながら、時勢の流れだと割り切っている。

皆が納得する形で、倉吉市立○○小学校がスタートすることを願ってやまない。

11/2

（第３種郵便物認可）

gakugei@nnn.co.jp

-4 11.4

私の視点

統合も子ども中心にして

岡田　耕治（新温泉町諸寄、67歳）

最近、最も私を安堵と感動させた本紙の記事は、9月23日付の1面。「『至誠小』条例急転可決、市長の取り下げ請求不承認、倉吉市議会」。さらに「教育現場への配慮を優先した」と。

子どもを中心にしたと感じた。鳥取県民でも住民でもない私が口を出すのは僭越だが、これを重々承知の上で「英断」とあえて申したい。

この統合への多くの投稿は、子どもや学校への深い愛情の表れと拝察している。私自身、統合中2校に6年間、統合小に2年間関わった。確かに名前は大切。異論は全くない。しかし一番大切なのは、統合する小学校の子どもたち。さらに心すべきは現1～5年生、今後の新入生たちだ。

その昔、「統合中完成は統合後3年かかる」と言う人もいた。私にはとんでもない話で、「1年勝負」と申し上げてきた。今回の統合小も、一年一年が勝負だ。まずは来年度が重要な勝負の年となる。

「段取り八分」の言葉通り、統合前が最重要。統合まで半年を切り、両校は統合に向けて準備中であろう。物やシステムの準備も大切である。しかし最も大切な準備は、子どもたちの心や態度、学力の育成であろう。例年以上に、しっかりと育てることが大切である。それには校内ならびに関係校の教職員の共通理解・協働が欠かせない。教育委員会の支援や指導・管理職の覚悟が重要であろう。

つたない経験から言うと、学校・学級経営は特別支援教育を土台にしてほしい。どんな時も仲間外れにしない。いじめのない学級、学校づくりが重要だ。誰もが分かる授業づくりは学力向上につながる。これで不登校を防ぎ、減らせたこともある。統合して良かったと言える学校になることを切に願う。

日本海新聞

11.4

至誠になった歴史考えて

深田　哲士（倉吉市駄経寺町、75歳）

倉吉市立成徳小と灘手小が統合されてできる小学校の校名が「至誠」と決まりました。どういう言葉でしょう？　「皆さんは、至誠、勇気をもって、次のことがらをよく守り、教育勅語の聖旨（おぼしめし）にかなひたてまつり、よき、日本人におなりなさい」。これは1907（明治40）年制定の「成徳校訓」です。私は至誠という言葉を今回初めて聞きました。もちろん使ったことなどありません。普通なら死語だと笑って済ませるところですが、母校の校名になると聞けば、黙っていられません。

辞書を引くと至誠とは「まごころ。この上なく誠実なこと」とあります。言葉に罪はありません。問題はその言葉がいつの時代にどういうふうに使われてきたかです。至誠を推す理由として、吉田松陰や橋田邦彦（東条内閣の文部大臣）ゆかりの言葉だと言われています。つまり至誠という言葉が使われたのは、幕末から明治、大正、昭和の敗戦までの間です。わが国が鎖国を解き、西洋の列強を相手に富国強兵を推し進め、ついには何百万、何千万人の犠牲者を出して敗戦に至るまでの時代でした。

その時代に、至誠という言葉に託して国が国民に求めたのは、第一に忠君愛国であって、親兄弟や隣人への真心や誠実はその次でした。今、わが国も世界も、持続が可能かどうかの瀬戸際に立たされています。そんな時代に、私たち倉吉市民は、未来を生きる子どもたちに、誰も知らない、百年も昔の倫理的言葉を校名として残すのでしょうか。

個人的には、緑あふれるこの故郷で学び、世界に巣立って、いつかまたこの故郷に、そんな希望を抱かせる優しい親しみを感じる学校名がいいと思います。今からでも遅くはありません。選び直しましょう。